

## 【埼玉】病院化の背景はCOVID-19積極対応、地域ニーズに応え病床増やす-鹿野晃・ふじみの救急病院院長に聞く◆Vol.2

2022年9月2日（金）配信 m3.com地域版

救急医療を軸に在宅医療や訪問リハビリも提供する「ふじみの救急病院」（三芳町）。2018年に開院したクリニックは2020年に病院になるが、その背景には地域ニーズに応えようとしてきた鹿野晃院長の思いがあった。COVID-19関連の受け皿を増やそうと帰国者・接触者外来とPCRセンターを開設し、行政の求めに応じて専用病床を設けて増設。「地域医療のモデルケースになりたい」と東京都に新病院を作る計画もある。（2022年7月29日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——先生は勤務医時代、救急医療や在宅医療、精神科医療など広く診療を重ねてきました。開業の経緯は。

勤務医として経験を重ねるなか、私が最も得意とする救急医療に注力するクリニックを作りたいと思うようになりました。救急クリニックを作るとなるとさまざまな機器が必要になり、多額のお金がかかります。そこで、CTとMRIを保有するクリニックで継承を考えているところがないかコンサルタントに協力してもらい、探しました。

出会ったのが、遠山脳神経外科で院長を務めていらっしゃる遠山隆先生です。遠山先生は私と同じくアメリカのペンシルベニア大学に留学したことがあり、キャリアに共通点があるほか、性格的にも馬が合いました。私は2018年に同院に副院長として参画し、継承の話もとんとん拍子で進みました。そして、半年後の11月に「ふじみの救急クリニック」を開院。遠山先生は今も当院の脳神経外科部長として診療されています。



鹿野晃氏（本人提供）

——継承が進んでの開院だったんですね。当時、クリニックがある三芳町周辺の救急医療はどんな状況だったのでしょうか。

私がこちらで開院した理由でもありますが、救急医療は不十分でした。周辺には救急患者さんを受け入れる医療機関が乏しく、ふじみ野市と富士見市、三芳町の2市1町をカバーする東入間医師会のエリアでは年に1万件ほどの救急要請があるそうですが、3分の1ほどはエリア外に搬送されると聞きました。開院には、「救急面で困っている地域でお役に立ちたい」という思いがありました。現在、当院で年に2000件ほど救急車を受け入れています。

——ふじみの救急クリニックは2020年12月に「ふじみの救急病院」になります。病院化の背景には新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応が絡むそうですが。

COVID-19対応で病床を増やしたことにより、病院になりました。元をたどると、2019年には有床診療所の開設許可が下りており、10床を稼働させていました。2020年にクリニックをリニューアルして新棟をオープンさせる計画があったので、それに合わせて有床診療所が持てる上限の19床に増やす予定でした。

そんな構想を抱いていたなかで起きたのがCOVID-19の流行です。2020年2月に埼玉県でも陽性者が現れ、当院もCOVID-19患者さんを診療するようになりました。当院はどんな患者さんも受ける救急クリニックですから、「COVID-19だけ診ない」という選択はありません。しかし周辺では同患者を診療する医療機関が少なかったようで、医師会から診療への協力依頼があり、その後、県から帰国者・接触者外来開設の要請がありました。

同外来を開設した後は、医師会を通じて加盟する全ての開業医に案内を送りました。「当院が感染者や感染疑い患者に対応していること」「これらの人の対応に困っている場合、患者さんに伝えていただければ電話と紹介状不要で当院が診療すること」。こんな旨を発しました。そして、24時間365日の救急体制を生かして常時稼働のPCRセンターを設け、結果が早く分かるよう検査会社も誘致しました。



1階にあるHCU

——COVID-19流行初期から立て続けに対策を打ってきたのですね。そして、病床も増やしたと。

はい。2020年4月、「埼玉県でCOVID-19患者が入院できる一般病床は47床のみ」というニュースを見聞きし、患者さんが路頭に迷う可能性を想像しました。県に病床開設の希望を伝えると、「すぐに受けてください」と返答。その日に患者さんが送られてきました。続いて県からは専用病床を臨時で19床作ってほしいと要望があり、それに応えました。クリニックの駐車場にプレハブの病室を整備していくと、有床診療所が持てる病床数を超えます。そこで、クリニックの廃止申請をして病院の開設手続きをしました。現在は38床を運営しており、クリニックでは保有できない重症者用のICUとHCUも保有しています。

——最後に、今後の展望をお聞かせください。

救急医療から在宅医療までシームレスに提供する医療機関のモデルケースになりたいと考えています。患者さんからすると、身近に救急医療と高度な検査が受けられる一方、かかりつけ病院としても長く通える。通院できなくなっても自宅で在宅医療が受けられる。こういった形の医療がもっと広がれば、と思います。

法人としては2024年、東京都小平市に計132床の救急病院を開設する予定です。急性期病床とICU・HCU、回復期リハビリテーション病床を備えるハイブリッド型です。加えて埼玉県のこちらではサテライトクリニックの展開や在宅医療の充実化も頭にあります。当院は災害時連携病院に指定されているので、有事には災害拠点病院と連携し、当院保有の救急車も活用して被災者を支援したい思いがあります。

救急医療への貢献は継続して行っています。救急ひっ迫が言われて久しいなか、行政保有の救急車は大切な資源です。本当に困っている人が速やかに搬送されるよう、当院が高齢者施設に積極的に向かうなどして役割分担を図ってきたい。病態の重い人は中核病院で手術を受けたり入院したりして、そこまででない人は当院が対応する。こういった取り組みの継続が地域医療の疲弊を防ぐとともに、地域包括ケアシステムの構築につながっていくのではないのでしょうか。



2階にはリハビリ室も備える

◆鹿野 晃 (かの・あきら) 氏

2002年藤田医科大学卒。青梅市立総合病院救命救急センターや在宅クリニック、精神科病院などを経て、2018年に「ふじみの救急クリニック」を開院。COVID-19への対応を機に増床し、2020年に「ふじみの救急病院」としてリニューアルオープンした。

【取材・文・撮影（顔写真除く）＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

